

第2分科会

自主活動

第1分散会

I. はじめに

討議課題をもとに討議の柱を立て、子どもの変容、教職員の変容、これからの展望について4本の報告を軸に話し合った。また、2日間を通して「子どもたちが安心して生活できる集団づくりをどう進めていくのか」、「反差別の活動をどう組織していくのか」、「自分にとっての自主活動は何か」というテーマで討議、交流を進めた。

II. 報告および質疑討論の概要

一報告1ー④

南葛定時制で同和教育を受けて

(東京都同教)

1本目のレポートでは、南葛飾高校定時制に入学し、部落出身の仲間と出会い、同和教育を受けたことで心を閉ざしていた自分自身の生き方が変わり、教員の道を選んだ報告者の変容が報告された。自分の変わり目や課題を振り返り、一人の生徒にこだわり、出会いを大事にしながら、これからも課題を抱えさせられている子たちにかかわっていききたいという展望が語られた。フロアからの質問に答える中で、「自身の立ち位置を問うていかなければならない」、「自分が南葛で学んだことを生徒たちに返していきたい」「生徒たちをつなげていきたい」「様々な事情を抱えさせられている子をあきらめないでということを伝えていきたい」という報告者の思いも明らかになった。

ー主な質疑と応答ー

長野 報告者の担任だった。高校時代の様子を知っているので報告者の変容がとてもうれしい。高校時代も障がいのある生徒や外国につながる生徒など様々な困難を抱えさせられている生徒がいたが、その子たちとのかかわりは、今の子どもとの出会いの中にどのように生かされているのか教えてほしい。

報告者 障がいのある仲間とのかかわりの中で、自分が勝手に意思の疎通はできないと決めつけていた。でも、それは自分の思い込みで、実はそうではないことをかかわりの中で学んだ。そんな出会いの中で、どうやって一緒に生きることができるようになるのかを考えるために、自分の立ち位置

を問わなければいけないと思うようになった。南葛での学びを生徒に返していきたいし、つなげていきたいと思う。だから今は課題を抱えさせられている生徒と積極的にかかわっていききたい。

兵庫 生徒同士をつなげる自主活動を今、どのようにつくろうとしているのか。

報告者 現任校ではあまりできていない。生徒の現状として人間関係が希薄で、友達のつくり方がわからないと困っている子が多い。仲間をつくりたいという気持ちはあるが、かかわり方が間違っていたりする。だからこそ、一人ひとりと話しながら、かかわり方を教えるところから始めている。

高知 南葛で生徒が部落を明らかにする取組が行われていたが、学校内でどのような体制がつくられていたのか。

報告者 自分は生徒だったのでわからないこともあるが、当時の南葛は部落研や朝文研、手話研など人権に対する意識がとても高い学校だった。その活動の一環として出自を明らかにして生きるという取組がなされていたのだと思う。

東京 南葛で教員をしていた。南葛では部落研、朝文研をはじめとしてさまざまな学びの場があった。学校全体で取り組んでいかなければいけない、そんな思いで活動をしていたし、学校全体で取り組もうという動きが当時はあった。

高知 報告者は、差別をしていた自分を許せないという思いがあると言っていたが、許せる自分になるために心がけていることはあるのか。

報告者 なかなか難しい質問だが、生徒とかかわる中で考えることはある。かかわり続けたことで子ども同士がつながったり、そんな場面を見ることができたときには自分の自信になる。そういう取組を続けていきたいし、他の先生たちにも「学校に來られない子をあきらめないで、忘れないで」ということを伝えていきたい。

福岡 報告者を頼ってきた生徒に対して、今でもかかわっていたりするのか。

報告者 Cはずっとかかわっているし、今でもつながっている。教員になってからは、学年主任という立場もあるので、担任の先生方に声をかけてつながってもらったりしている。

宮崎 演劇を通して学んだことは何か。

報告者 高校時代の演劇を通して、部落とは自分の思っていた地域としての部落ではなかったということを知った。本人自身のことではないことで周りから攻撃されたりしていることも知った。C とのかかわりがあったからこそ、いい加減にしてはいけないという思いがあった。

一報告2ー②

居場所と学習が両立する学校外の間をめぐって (大阪市人教)

2本目のレポートではNPO法人「IKUNO・多文

化ふらっと」が大阪市生野区の地域で展開する「こどもみらい事業」の中の学習サポート教室 DO-YA の実践が報告された。その中で学習支援事業をはじめとする場づくりの現場を例に、子どもの権利を守ることを根幹に据えることで居場所づくりと学習の両立をめざすという展望が語られた。学校だけ、地域だけでは支えきれない子を一緒にあって支える体制をどうつくっていくか、子どもたちが自分で選択し、決定できる場、選び直しができる場が大切で、そんな場をどうつくっていくかということが討議の中で話題にのぼった。

ー主な質疑と意見ー

京都 Aさんの高校はAさんに対してどのようなかわりがあるのか。

報告者 大阪の学校はすごく頑張っている。小中学校にはセンター校があって、取り出しや支援ができる。しかし、支援が必要な子どもがすごく多いので、学校の支援が届かない子どもも多くいる。外に学習支援の場ができてはいるが、足りないのが現状。あふれてしまっている子どもたちに対して、地域でサポートしていけると良いと思っている。支援ができる人が足りていないからこそ、学校と協力してやっていくことも大切だと思う。しかし、どうやって協力体制をつくっていくかというところに難しさを感じている。

京都 報告者はどのような思いでDO-YAにかかわっているのか。どのようなことを大事にしてDO-YAにかかわっているのか

報告者 DO-YAを立ち上げたときの思いは、差別と貧困をなくし、誰もが大事にされた社会をつくること。そのための教育への支援だと考えている。その時からずっと思っているのは、その子どもがすべてを選ぶことができるわけではないが、自分のことを少しでも決めるという経験や選びなおす機会を経験させることが大事だと考えている。学びの先にそのような機会があると思う。

東京 地域に受け入れ先があることは大事だが、学校が地域に丸投げしてしまうのは違うと思う。学校はできる限りの支援をしていかなければならない。支援が学校の中でできたらいいな—と思っている。ただ、学校だけ、地域だけとなるのはいけないと思う。みんなでやるという意識が大切である。

高知 DO-YAに來ている子どもの保護者とのつながりはあるのか。

報告者 Aの家庭とはあまりかかわれていない。A自身も親とかかわってほしくないと言っている。何とかかかわりたいとは思っているが、具体的な動きはとれていない。A以外の子の保護者とは連絡を取ることもある。難しいことも多いが、色々な話ができる関係をつくれる場合もある。ただし、子どもの保護者に対して何かを分かってほしいという方向で話をするのか、とにかくつながっていき

いという方向で話をしていくのかはまだわからないし、悩んでいるところでもある。まずは話してみるところからになるかもしれない。

大阪 報告者の横で一緒に活動してきたものとして感じていること。それは、学校だけでは抱えきれないものがあるということ。だからこそ、地域と一緒にやっていくことが大切だと思っている。

大分 DO-YAのかかわりの中でAさんが生き生きと活動できるようになった事例があれば教えてほしい。

報告者 Aは同じルーツの子とずっと一緒にいるわけではなく、どちらかと言えば距離をとっている。一つのグループにずっといるのではなく、職員やボランティアともかかわることが多い。普段は勉強を頑張っているが、それ以外の行事の時などに物怖じせずに人とかかわれるところがAの強みだと感じている。

協力者 今回の報告は、地域で支援が必要な子どもの居場所をつくっているという実践であり、これまでの自主活動分科会での学びをさらに深めることができる貴重な報告だった。

(1 日め総括討論)

東京 報告の中で、子どもの居場所の話が出ていたが、居場所はやはり学校で作るべきなのではないかと考えている。

京都 子どもたちの居場所を学校でつくるという意見が出たが、自分は学校外の間があることはすごく大切なことだと思う。学校外の活動で生徒が生き生きとした表情を見せることがある。それをこれまでの子どもとのかかわりの中で学ばせてもらった。学校の中では見せない子どもの顔を見ることができる場所はすごく大切だし、家でも学校でも言えないことを言える居場所って大事だと思う。逆に、学校が抱え込みすぎないことも大事なのではないか。

東京 自分自身も部落の生徒とのかかわりの中で差別の現実に触れ、自分自身が問われていることに気づいていった。そんなことを振り返りながら聞いていると、1本目、2本目の報告に共通する点も多くあった。私たちは、子どもたちが語りたいと思える居場所を継続してつくっていくんだという覚悟があるかどうかを問われていると感じた。自分が選んで自分が主体となって集まる場所をつくる、これは2人の報告に共通することだと感じた。

協力者 子どもの意見をしっかり聞き、その子が何を望んでいるかを知ること大切。最終的にはいろいろなところとつながっていけるといいが、子どもたちが学校に何を望むのか、学校でどんな自分でいたいのか、そんな話ができると良い。子どもの居場所をどこに求めるのか、どんなふうにつくっていくのかを考えていきたい。

東京 自分は教員をしているが、自分のことを語

れるようになってほしいと思って生徒とかかわっている。学校というコミュニティの中だけで終わるのではなく、いずれ子どもたちは社会の中で生きていかなければならない。「自分は自分でいいんだ」という思いをもって学校にいてほしいし、社会の中で生きていってほしい。

大阪 報告者(大阪)とは、学生時代に一緒に活動していた。現在、地域で活動している。自分も外国や部落にルーツがあるが、いることが許される場所がほんのり抑圧的だと感じることはある。自分のことを語れないことの抑圧。排除されているわけではないが、そのように感じることもある。そんな世の中で、自分が感じていることは、子どもたちの選択肢を増やすことが大事だということ。子どもたちは、心の所在を求める場面がある。それは学校でもいいし、学校以外の場でもいい。それを自分で選べるのが大事なんじゃないか。学校も頑張っていると思うけど、学校でしんどいときにはぜひ頼ってほしい。自分としては子どもの選択肢になるような場を作っていきたい。

報告者(大阪) 自分もそう思う。子どもが選ぶ場所は一定ではなく、どんどん変わっていてもいいと思う。

報告者(東京) 学校以外に居場所となるような場があることがありがたい。でも、学校以外の場があるから学校はノータッチで任せきりとなってはいけけない。私たち教員は学校に心の拠り所になる場所をつくる努力をしていかなければいけないのではないか。地域の居場所はいいいが、学校はダメ、ではなくて、どちらも OK になるように努力していきたい。子どもたちの実態から教員もちゃんと学ばなければならない。学校って何なのかが今問われていると感じる。

千葉 日本語の指導について聞きたい。日本語の指導が入る子と入らない子がいると思うが、どう教えていけばよいのか。

報告者(大阪) 日本語指導は専門ではないが、日本語ボランティアをしている人の様子を見て思うこと。それは、留学生に日本語を教えるのと子どもに日本語を教えるのは全く別物だということ。子どもに教えるときは、子どもの生活に根差したものでないといけけないし、子どもの日本語への向き合い方や日本にいてることをどう思っているのか、そんなことを考えていかなければいけない。日本語を何のために学ぶのか、日本語を使ってこんなことをしたい、そんなことを自分は子どもたちに語っていききたい。学ばないと生きていけないよ、というしんどい状況は作りたくないと考えている。

東京 自分は昔、全同教大会に参加したときにすごい感動を味わった。その時の思いがあるから、今は教師を退職したが、地域の勉強会や子ども会を立ち上げている。外国籍の子もたくさん来ている。なぜ来るのかな、と考えたときに、母国語で会話が

できるからだ気づいた。まさにここが居場所になっていると感じた。学校現場は忙しいし、地域によって様々な事情があることもわかるが、一人でも始められる取組はある。大事なことはそこで一歩踏み出して動けるかどうかではないか。

協力者 本日の報告のキーワードは「子どもの居場所」をどうつくるのか。子どもたちが安心して過ごせる居場所にするために、自分のことが語れるなかまづくり、自分が選べる選択肢をつくること、子どもの権利を保障すること、一人ひとりの子どもにこだわること、子どもの背景を見ていくこと、そんなことを大事にしていきたい。学校の居場所も大切だし、学校外の居場所も大切。どちらも必要だと思っているからこそ、つながって連携していく必要がある。

一 報告 3-③

迫間「高校生の集い」から「つどい」へ

(三重県人教)

3本目のレポートでは、今年度から青年も参加することになった迫間「つどい」の活動について報告された。「つどい」を部落問題解決の担い手の活動の場となるように活性化するとともに、高校生たちが意欲的に集まれる場にしたいという報告者の思いが語られた。自分の思いをしっかりと語れる場がある、差別を他人ごとにせず自分ごとにしていってほしい、そんな仲間と一緒に生きていける、そんなつどいにしてほしい、していきたいという願いが語られるとともに、学校、集会所、行政、自治会などみんな差別のない社会をつくっていくことの大切さも確認された。

一 主な質疑と意見一

京都 隣にいる友達を大切にすることが差別をなくすことにつながるという言葉があったが、隣にいる人について、今どんな人の顔を思い浮かべるか。

報告者 今、一緒に活動している仲間たちのことを大事だと感じる。自分一人でも人権学習はできるけど、自分は周りの人がいたから今の自分があると思っている。一緒に勉強した仲間や友達のことを思い浮かべる。その隣の人を大切にするためにつながっていかなければならないと思った。

京都 人権感覚という言葉が出たが、報告者はその言葉をどう解釈しているのか。

報告者 今、差別に対して無自覚であったり無関心であったり、そんな人が多いと感じている。だからこそ、学んでいかなければいけないと思う。人権問題は部落問題だけじゃないし、自分とは関係ないと思っていたことが実は関係していたりする。だから、差別を他人事にせず、自分事にすることだと思っている。

高知 つどいの活性化についての質問。今一番大きな壁だと思っていることはあるか。活性化する

ための実践でうまくいったことはあるか。子どもの具体的な姿があれば教えてほしい。

東京 つどいと学校のつながりはあるのか教えてほしい。一緒に頑張ってくれる先生はいるのか。

長野 つどいが自分のことをしっかり語りながら生きていける、つながっていけるそんな場所にしてほしい。今つどいはそのような場所になっているか知りたい。

報告者 集会所と学校が連携しているなど感じるの、集会所の学習を先生が進行していたり、出会い学習に先生が学びに来たりしているとき。自分も講師として学校で話をさせてもらったりしている。自分はつどいのなかで差別にあったときの話もできるし、他にも語った子がいる。誰にも言えなかったことを語れた子もいる。つどいの中で「話したい」と思えるような雰囲気があるのではないかと考えている。

三重 自分は地区出身ではないが、友達に誘われて学習会に参加している。地区出身ではないが、友達の人権問題は自分の人権問題だと思っている。今もつどいに参加できることがうれしいし、つどいは自分のことを語れる場だと思う。つどいに若い人もたくさん参加してほしいし、被差別の立場ではないからこそやれることがあると思っている。

三重 集会所のある学校の教員。学校としても学習会の参加や部落問題学習を進めている。教員が自分の部落差別の出会いについても語る取組をしている。

三重 迫間の自治会長をしている。自治会としてもつどいの活動をサポートしていきたい。この活動は、学校、集会所だけでなく、自治会としてもかかわっていかないといけないと思っている。学校、集会所だけが頑張っても状況は動かない。だからこそ、学校、集会所、自治会、行政みんなでやらないといけない。あらゆる差別を許してはいけない社会をつくらないといけない。そういう思いで、みんなで一緒にやっていきたい。偏見はなかなか抜けていかないかもしれないが、報告者たちの子どもたちが差別されないような世の中にしていくために自分も頑張っていきたい。

福岡 自分は、今一人で活動を続けている。でも、ずっと運動を続けてきてよかったと思っている。報告者の周りにたくさん支える体制ができてることがとてもありがたいし、素敵なことだと思う。そのなかの中では、差別は起こらない。でも、報告者が一人になったときに差別は襲ってくる。そんなときにどう立っていくのか、それが問われている。自分の中で出身であることをどう大切にしながら生きてきたのかが問われている。被差別の子たちの命を守る活動が自主活動。部落出身であることを誇りに思っていてほしいし、そのことを忘れないでほしい。

一 報告 4 ー①

こんなステキな中学会に・・・

(高知県人教)

4本目のレポートでは、子どもの声から再発足した中学会の3年間の活動と子どもたちの変容が報告された。レポートの中では報告者自身の部落問題との関わりかたや子どもたちとの関わりの中で指導員として学んだことについて語られた。部落差別をはじめとする差別の現実について語ることができる環境があることが大切だし、中学会がそのような場になっていることの価値が確認された。中学会を通して、これからも学びを積み重ねてほしい、日常的に色々なことが話せる場をつくってほしい、これから先も続けていってほしいという声もフロアから出た。

ー 主な質疑と意見 ー

京都 一人ひとりの違いを認めるという言葉があったが、違いを認めるとはどういうことか。認めるという言葉の中には権力構造がある。そういうことも考えていけるとよい。

京都 さまざまな人権課題について学ぶことの意味は何か。

報告者 子どもたちはある立場では被差別だが、状況が変われば加差別の立場になることがある。部落差別についての学びだけではなく、自分も含めて様々な差別について学びを深めていきたい。学習したことがいつか必ずつながっていくと思う。

京都 様々な差別の中にある課題は単発の物ではなく、つながって、重なり合っていると思う。そう考えると、差別は心の中の問題ではなく、社会制度の問題としてとらえることも大切なのではないか。

東京 中学会の子どもたちの具体的な姿が知りたい。

報告者 学びを積み重ねていくうちに、なぜ差別があるのか、差別って何なのか、そんなことを考えるようになっていくと思う。今は被差別部落出身ではない子どもたちが学習会に多く参加しているが、自分の受けた被差別体験などを語れる場になっている。

大分 行政とのつながりをどう作っているのか。

高知 行政の職員だが、もともとは同和問題の解決のための教育、就労のための連携だった。法が切れた後も、子どもたちの居場所として残したいという思いがあり、現在につながっている。子どもの居場所は学校とのつながりが大事だという考えから、教育委員会の管轄になっている。子どもの居場所づくりを大切にしていきたい。

大分 自分の地域の状況だが、子どもたちが自分のことをカミングアウトできていない状況がある。

どう学習会を進めていけばよいか。

香川 だんだんしんどい状況にはなっているが、自分は保護者会を突破口にしている。保護者と一緒に学ぶ場、語る場をつくろうとしている。勉強していく中で保護者と相談できる場を作り、勉強していく中で自然と出身を伝えられるようになればいいと思っている。行政も協力してくれている。最終的には立場宣言をするかどうかは、その子がどう思っているかが大切だが、このような学びを続けていくことが大切。

東京 部落差別のことを自信をもって話せる、日常的に部落差別の話ができる、それはとても素敵な場だと思う。自分自身の実践を振り返ると、部落の子に出会えていない現実気づかされる。この取組を学校の先生を巻き込んで続けていってほしい。

報告者 最初は学校の先生とのかかわりは個だった。この人のクラスなら話せる、みたいな感じだった。でも、何年かたって、学校全体で取り組んでくれるようになったと感じている。すべての先生が、学校が理解しようとして動いてくれるようになったと感じている。

長野 中学会をぜひ続けていってほしい。子どもたちがつながって、語れる場を続けていってほしい。

Ⅲ. 総括討論およびまとめ

東京 報告の感想だが、三重の報告者は教員になるということを語ってくれた。自分も一緒に頑張りたいという気持ちにさせてもらった。自分はずっと一人で実践してきた。壁にぶつかることもあった。だからこそ、しっかりつながれる仲間をつくってほしい。

長野 差別の現実はまだまだある。だからこそ、ここに集っている皆さんには、差別に立ち向かえる子どもたちをぜひ育てていってほしい。

東京 自主活動はつながりが大事。その子の一生の付き合いができる覚悟をもって自主活動を進めていきたい。

三重 感想になるが、自分たち若い世代にできることは何かを考えた。皆さんの話を聞いて、自分たちにもできることがあると思って自信がもてた。差別をなくしていくという軸はみんな同じなんだと感じた。だからこそ、お互いの意見を尊重したり、刺激し合えるといいなと思った。

京都 子どものグループをつくるときにぜひ考えてほしいこと。それは、グループを作るときに誰かを排除している可能性があるということ。結婚差別の話をするときに、そこに同性愛の子たちのことが頭にあるかどうか。そんなことを考えていかなければいけない。常に誰かを排除しているかもしれないと思って自主活動をつくっていかないとけないと思う。

東京 部落の子が部落を名乗って生きることができるような社会をつくっていききたいし、そのような取組を進めていきたい。

報告者（東京） 改めて保護者の話をしっかり聞いていかなければいけないと感じた。自分はそれができる教員になりたいし、なれているのかを問い続けながら子どもたちにかかわっていききたい。取組は細々としたものかもしれないが、続けていくことの大切さを感じた。

報告関係者（大阪） 子どもを取り巻く状況は非常に厳しい。社会の中には様々な制限がある。子どもたちが今どのような状況にあるのかをしっかりと知っておいてほしい。様々な人権課題はつながっている。だからこそ、色々な人がつながっていかないといけないと思う。

報告者（三重） 前向きな話をたくさん聞くことができて、勇気をもらった。色々な人と出会って、自分の考え方が変わった。今の自分があるのは人権学習があったから。こういう出会いがあったからこそ、今まで自分はやってこれた。自分は部落出身だけど、この活動に誇りをもっている。差別される経験を子どもたちにしてほしいけど、人として自分は成長できた。そういう思いを子どもたちにもつなげていきたい。これから自分が頑張っていきたいことについても色々考えた。今回のレポート報告は自分にとっての伝える実践だったが、うまく話せないことがいっぱいあった。これからもっと色々な経験をして自分のことを話せるようになりたいと思った。この大会では色々な学びがあった。また参加したい。

報告者（高知） 自分の理想は学習会をつどいのような場にしていくこと。今回、三重の実践を聞かせてもらって、目の前に理想とするような実践があることがわかってうれしい。自分のやってきたことの振り返りにもなった。これからまた頑張っていきたい。

Ⅳ. おわりに

自主活動分科会では、部落差別をはじめとする様々な人権課題の解決をめざして、子どもたちがくらしを「見つめる」「語り合う」「つながる」なかまづくりの取組をどのように保障してきたかをテーマに掲げてきた。今大会においても4本のレポートから、学校、職場や地域で人とどうつながっているのか、地元の人権課題にどれだけ学んでいるのか、目の前の子どもたちになかまのどんな生活を伝え、共有させているのか、そしてそのことを反差別的の自主活動としてどう構築しようとしているのか、ということが問いかけられた。

2日間を通して、「子どもたちがここにいていいんだと安心できる居場所をつくるのが大切」「その居場所は子どもたちが生き生きと活動でき、自分の生き方を選択・決定できる場にしたい」「選択できる場が

大事。そんな選択肢を増やしていかなければいけない」「学校・地域がそれぞれに子どもの居場所になる場をどう作っていくのか」「学校だけ、地域だけではなく、一緒になってできることは何かあるのか」「子どもを育てていくために周囲の大人がどうつながっていくのか」「差別のない世の中をつくるために動いているのかという、自分自身の立ち位置が問われている」「反差別のなかまづくりをどう進めているのか」「取組は地域、学校、行政、自治体、みんなでやっていくことが大事なんだ」「できることを身近なところから進めていく、そして続けていくことが大切。そしてそのなかまを広げていってほしい」「差別をなくしていくという軸はみんな同じ。そこから派生する考え方は違う。だからこそ、お互いの意見を尊重したり、刺激し合ったりするといい」ということが話題にのぼった。討議の中では、報告者自身の変容、子ども集団の変容、それぞれの地域の差別の現実、そんな中でどう自主活動を組織し、子どもたちのなかまづくりを進めていくかということが話題になった。実践を進めていくときには学校、地域、行政などみんなで取り組んでいく大切さ、続けていくことの大切さ、広げていくことの大切さが語られた。

本分散会での論議・交流を通して大切だと感じたことが4点ある。

①1点目は、子どもの生活背景をつかむこと。すべての教育活動は、子どもの姿、子どもを取り巻く現実から出発する。気になる言動を見せる子どもが何を考え、どんな思いでいるのか、どんなくらしの中で生活し、学校に通っているのか、保護者はどんな願いをもっているのか。子どもの背景をつかむためには、くらしや思い・願いなどについて対話できる関係を、子どもや保護者と築くことが必要だと感じた。

②2点目は、しんどい思いをしている子どもを中心に据えた取組を組織すること。集団の中で疎外されていたり、不安を感じながら生活していたりする子どもが安心して過ごせるようにすることは、誰にとっても居心地の良い環境をつくることにつながる。

③3点目は、一人ひとりが生活の中で感じている不安や悩みを語り合い、共有し、共に乗り越えようとする集団をめざすこと。多くの支えの中で語られた一人ひとりの思いを共感的に受けとめ合うなかまとのつながりの中で、子どもたちは自分の存在の価値に気づき、課題を克服し自らの生き方を切り拓くことができるようになるのである。

④4点目は、差別を許さない世の中、社会に変えていくという意識をもつこと。一人の子どもの生きづらさの背景に人権問題がある場合、その生きづらさは社会の問題であり、他の子どもにとっても共通の課題となる。「なかまづくり」を基盤に、気づ

きや学びを積み重ねることが、ともに生活や社会をよりよくしようとする意欲や行動力を高めることにつながると感じた。

子どもたちはさまざまな形で自身の危機を訴えるサインを送っている。また、子どもたちとかわかっていくと、そのサインさえも出せずにいる子どももいることに気づく。だからこそ、わずかなサインを見逃さないことや、サインにならないちょっとした表情の変化や仕草、つぶやきなどから子どもの変化に気づくことなど、意識していきたいことがたくさんある。それは、日ごろから子どもにかかわる私たちだからこそできることなのである。論議・交流の中から、子どもたちのくらしを丁寧にとらえ、「差別の現実」をつかみ、子どもたちを取り巻く課題を社会問題と位置付けて、子ども一人ひとりの自己実現につながる取組を創造する必要性を感じた。そのためにも、子どもたちのくらしの現実に出会い、徹底的にかかわることが大切である。

自主活動は、子どもたちが自らの置かれている状況を見つめながら、一人ひとりがくらしの中で感じている思いを出し合い、その思いを束ね、集団としてまとまりながら安心して過ごせる社会を実現していく活動である。実践を積み重ねると、子どもたちが自らの「思い」を語ったり、書き表したりすることで、なかまの思いや痛みを自分のこととして受け止めたり、ともに考えたりすることができるようになる。そのような取組を重ねる中で、なかまの絆を感じとり、生きるエネルギーを獲得していくことができる。認め合い、支え合う集団の中で、子どもたちは人権感覚や人権意識を磨き、学校・地域の中で反差別、人権尊重の文化を創りあげていくのである。だからこそ、子どもたちが生活を見つめ、語り合い、ともに考え、ともに支え合う「なかまづくり」を軸にした自主活動の実践が大切なのである。

そして、それにかかわるおとなは保護者や子の思いを丁寧に聴き、かわり続けていくことが大切である。具体的な課題の中から子どもたちを励まし、生きる力を獲得できるように、すべての子どもたちの未来を保障する自主活動を進めることが求められている。子どもたちがそこにいることが保障され安心して生活できるなかまづくり、この人たちに語ってもいいかなと思えたときに安心して自分のことを語ることができるなかまづくり、困ったときに安心して「助けて」と言えるなかまづくりを学校・地域総体で進めていきたい。さらに、何よりも自分自身が「どこに立って、同和教育・人権教育にとりくむのか」という立ち位置を明らかにすることも求められていると感じる。

最後に、今大会の4本のレポートには、実践者と子どもたち、保護者、地域などとの「確かな出会い」があった。その出会いから「人と人との確かなつながり」が築かれていた。「つながり」の中で、実践者が自身と向き合い変容していく姿があった。

一方、会場にはたくさんの参加者があり、熱心に意見交換がなされた。長年にわたって取り組みを積み上げてきた人と地域があれば、いまようやく実践をはじめようとしているところもあった。また、学校・地域ががっちりと連携して取り組んでいるところがあれば、たった一人で取り組んでいるところもあった。しかし、差別が存在する社会を生きる一人として、自分がどう生きるのか、周りとのどんな関係をつくっていくのか、差別心や加差別性に自分自身が向き合うということが具体的にどういうことなのかを報告や討議の中で確認できた。

まずは、自らが差別をなくす主体者となるための一歩を踏み出すことから始めたい。どんなに小さな取組でも、差別のない社会をつくる推進者として自分にできることを自分らしく地域のなかまとともに取り組んでいくことが大事だということを確認して、本分科会のまとめとした。